

津田左右吉と丸山敏雄

—神代史をめぐる乖離と接近—

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

徹底的にこの津田博士の、これは学界では「述作説」と申して居ります。この「述作説」は覆へさなければならんと云ふのが私の深く考へる所でありました。（丸山敏雄）

はじめに

筆者がライフワークとしている研究課題の一つが「丸山敏雄の研究」である。これまでいろいろな角度から論考を試みてきたが、そこには敏雄と直接間接に関わりが深い人物との比較考察も含まれている。

これまでに採り上げた主な人物には、広島時代の恩師である戦前の著名な倫理学者の西晋一郎、新興宗教教団「ひとのみち」の開祖で「真理の恩師」と敏雄が敬慕した御木徳一、「ひとのみち」時代の先輩格の准祖で共に裁判を闘った湯浅真生、戦後のベストセラー『生きゆく道』の著者でカント学者の天野貞祐、禊の行法や靈魂論を体系化した神道家の川面凡児がいる。そして今回はそこに、近代日本における東洋史学の泰斗である津田左右吉（1873-1961）を加えたい。

実は津田左右吉と丸山敏雄については、すでに別の小論でも採り上げ、拙著『丸山敏雄と日本』（倫理文化研究叢書4、倫理研究所刊、2012）にもそれを収めている。ただしその論考は、紙数が少ないために十分な考察はできておらず、筆者としては不本意なまま終わったものであった。今回は改めて真っ新たな気持ちで津田の著作と向き合い、とくに津田学説が戦前において正しく受けとめられたのかどうかを中心に、丸山敏雄と津田左右吉を比較的に論じてみたい。

二人を比較するとき、重きを置きたい視点が三つほどある。第一は、津田の神代史研究をめぐる敏雄（あるいは当時の識者）の理解である。戦前の日本では「万世一系の天皇が皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治する」ことが日本の國體（ここでは旧字体で示す）とされた。皇祖とは記紀神話に描かれた天照大神であり、その子孫である一系の皇統が存在していることが國體の前提となる。国民道徳も國體に基づくものであり、その涵養が戦前の教育の眼目とされた。

青年期から国史を専攻した教育者の丸山敏雄は、國體研究の深化をみずからに課して励んだ。他方、大正期に入ると、津田左右吉は神代史の新しい研究成果を次々に発表し、その学説は國體を破壊する危険思想とまで見られるようになる。津田学説は19歳年下の丸山敏雄をして、日本古代史研究に激しく駆り立てることにもなった。果たして津田学説は、丸山敏雄を含む当時の人々に正しく受けとめられていたのだろうか。

第二の視点は、戦時中の宗教・思想の弾圧および裁判事件である。津田も敏雄もその被害者となったが、事情がまったく異なり、両事件の関係もない。とはいえ共に不敬思想の取り締まりの一環として検挙され、長い裁判を余儀なくされた。その出来事を、とくに津田の場合を中心に確認し、敏雄の場合と比較してみたい。

さらに第三の視点は、天皇および皇室をめぐる津田と敏雄の見解である。津田は戦後に澎湃と起きた天皇制否定論に対して、「万世一系の天皇」を否定するどころか、天皇・皇室を擁護する論陣の先

頭に立ち、世の識者を驚かせた。敏雄は敏雄で天皇制を肯定する論文の執筆に孜孜として打ち込み、一定の知見を得た。両者を比較するとき、共通した何があったのであろうか。

以上の三つの視点のすべてを一篇の論文に盛り込むことは、紙数の制限からして不可能であるため、本稿では第一と第二の視点を中心に論じたい。なお、丸山敏雄に対しては、これまでの拙稿でもそうしたように「敏雄」と呼ぶ場合が多い。